国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成26年3月1日発行　第38巻第3号通巻第438号

月刊みんぱく

2014 3月号

特集

夢か、うつつか

夢をみる／夢をかく　荒木 浩
夢と心理学　河東 仁
見たい夢・見たくない夢　木村朗子
インド、移動民社会の夢見　岩谷彩子
脳の信号から夢を可視化する　神谷之康

月刊みんぱく
平成二六年三月一日発行　第三八巻　第三号〈通巻第四三八号〉〈編集・発行〉国立民族学博物館
2014 3

地球に棲む詩人たちを愛する

和合（わごう） 亮一（りょういち）

十数年前のことである。かつて中国の青海省において、国際詩祭なるものが開かれた。私にとっては初めての海外旅行であり、見るもの聞くもの食べるもの、その全てが珍しかった。しかし最も興味深かったのは、各国から集まって来た代表詩人たちの姿である。日本の詩人しか知らなかった私は、他の国にも詩を書く者たちがそれぞれにきちんと存在していることに、強い感動を覚えた。

見るからに「詩人」という出で立ちの人物が居た。膝のあたりまで白い髭を伸ばしていて、仙人のような面持ちのご老人である。アルゼンチンで知らない人がいないぐらいの大詩人だとうかがったが、その姿のオーラに納得した。またアメリカやヨーロッパの詩人たちは、とてもお洒落な恰好であった。日本代表として私も負けずに頑張ろうと（何を？）、気持ちだけでも張り切ったものだった。

研修旅行ということで黄河の源流を見に出かけた。バス十数台で連なって向かったのである。最初の数台は各国の代表者たちであり、その後続車は全て中国全土から集まった詩人たちであった。山から山の谷間を抜けながら、車の列の影を眺めて、詩人とはこれほどまでにこの世界に存在するのだ（イヤ、実際はこの数十倍は全世界にいる）となんだか嬉しくもため息をついてしまったのを今でも覚えている。

帰り道に車内で、本日の晩餐に、各国で一人ずつ自作詩の朗読を披露して欲しいと言われて、私は手を挙げた。夕食を食べながら待った。しかし、いつになっても朗読会の雰囲気にならないので、中止になったのだろうとリラックスして酒杯を空けていたところ、スタッフの方に肩を叩かれた。

案内されるまま会場へ。舞台はタキシードを着た司会者とオーケストラ、そして千人近くの青海省に暮らすお客さんで埋め尽くされていた。呆気にとられながら、私は三番目に日本語で朗読。アルコールの勢いも手伝って、いつもよりもエキサイト＝絶叫してしまった。拍手をいただいた。地球に棲（す）む数多くの詩人たちと埋め尽くした聴衆の影を眺めて、酔った頭で大げさにはっきりと分かったのだった。

こんなにも世界は、詩を、言葉を、そして、詩人を求めているのだ。あらゆる言語が世界中にあったとしても、それがあれば、詩は必ず生まれ続ける、詩人はあり続ける。

その後も世界を幾度か旅した。異郷の詩人たちとの出会いを重ねる度にやはり直感するのだ。言葉がある限り、そこに宿るのが詩なのだ。そこに絶対に生まれる何かこそが、それそのものなのだ、と。

プロフィール
1968年福島県生まれ。福島市在住。詩人。高校の国語教師。『AFTER』（思潮社）で中原中也賞を、『地球頭脳詩篇』（思潮社）で晩翠賞を受賞。2011年3月11日、伊達市にある学校で被災。避難所で数日過ごした後、ツイッターで詩「詩の礫」を発表し続け大反響を呼ぶ。近著に、『心に湯気をたてて』（日本経済新聞出版社）、『いきる（大人になるまでに読みたい15歳の詩）』（ゆまに書房）などがある。

月刊 みんぱく
3月号目次

1 エッセイ　千字文
地球に棲む詩人たちを愛する
和合 亮一

2 特集
夢か、うつつか
2 夢をみる／夢をかく　荒木 浩
4 夢と心理学――夢は合わせがら　河東 仁
6 見たい夢・見たくない夢　木村 朗子
7 インド、移動民社会の夢見　岩谷 彩子
8 脳の信号から夢を可視化する　神谷 之康

10 似たモノさがし
ドリーム・タイム
山中 由里子
12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
未来世紀のミュージアム
野林 厚志

16 多文化をあきなう
さをり織りで、記憶を紡ぐ、歴史を紡ぐ
東山 高志

18 フィールドで考える・退官寄稿
パゴダと軍事の国にあって
田村 克己

20 人間学のキーワード
贈与
岸上 伸啓

21 異聞逸聞
モノグラム美術
岡本 光博

22 制服の世界、世界の制服
一九八二――民主化にゆれた韓国の学生服
太田 心平

24 次号予告・編集後記

特集

夢か、うつつか

夢の見方は十人十色。しかし、共同体で共有される夢のパターンもある。
人はなぜ夢を見るのか？
人類は夢を語り、描くことにどのような思いを託してきたのか？
夢と現実世界はどのようにつながっているのか？
脳科学、心理学、宗教学、文学、美術、民族学などさまざまな分野から、人類の夢路を辿る。

夢をみる／夢をかく

荒木浩　国際日本文化研究センター教授

夢を書く

初夢ということで、正月には、夢を特集した雑誌が目にとまる。昨年は『考える人』が「特集　眠りと夢の謎」と題して編集され、面白く読んだ。今年は、書店で『すばる』一月号を拾い読みしていたら、村上龍の「夢の記述」という掌編に遭遇した。

筒井康隆などは、心理学を学んだということもあって、かつて夢の記録を付けていると書いていた。村上も、二〇年以上も前から、夢の記述を続けているらしい。村上のこのエッセイは、自分の夢の記も紹介しつつ、その要点を簡潔に指摘していて興味深かった。人称がなぜか「ぼく」や「わたし」ではなく「おれ」になること。記述は現在形がふさわしいこと。論理や展開に飛躍や矛盾があること。どのジャンルの文学作品でもないこと。そして小説では決してやってはいけない、夢をただ「なぞる」かたちで記されること……。それ故に、「夢は、おそらくわたくし自身に属していないのだ」と閉じている。村上の「ウナギとキウイパイと、死」という短編（『白鳥』所収）が叙述する夢日記を彷彿とさせる。

わたしも、日本古典文学研究の視点から、夢の記述に関心を抱いている。たとえば中世には、四〇年以上にわたって記述された明恵（一一七三―一二三二）の『夢記』がある。現存する部分でも、三〇年ほどのときを数える。この驚異的な記録にも、まさに人称の問題があり、記述の非論理的飛躍となぞり、そして夢の他者性など、村上龍の体験と重なる要素が多く含まれる。『夢記』は「夢日記」とも呼称された。文学的な研究対象でもある。

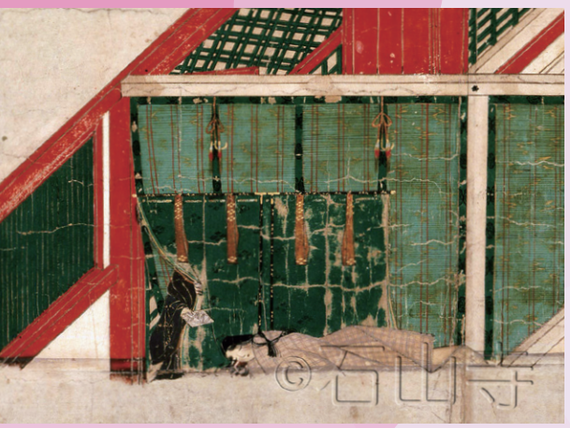
日本初の本格的夢研究の書、石橋臥波『夢』より（部分、寶文館、1907年、国立国会図書館蔵）

夢を観る／夢を描く

明恵『夢記』には、ときに印象的な絵が添えられている。『石山寺縁起絵巻』や『春日権現験記絵』など、日本中世の絵巻類にも、さまざまな夢の絵画化がなされている。一方で昨年、神谷之康氏らのグループにより、夢の内容を科学的に解読する試みがなされたと新聞で報じられた。少し乱暴なまとめ方をすれば、夢の視覚化とは、古代から現代までを貫く、文化表象研究の重要なテーマなのである。

ところが中世の絵巻では、夢のなかと現実の世界とを隔てなく描く。うっかりすると、場面の意味を見誤ってしまいそうだ。そこで夢を括って、夢見の人と結び付けるという描写法も必要となる。その特徴的な画像が、室町時代後期以降に頻出する、フキダシの夢である。

フキダシを含めた日本絵画史における夢の形象については、加治屋健司氏や三戸信恵氏によって、研究が大きく進展しつつあるが、フキダシという合理化は、いずれ夢を個人の脳裏に帰し、神仏の夢告や他者の想いの反映という、古代の夢の外部性をいつしか排除する。そこには夢の所有観をめぐり、中世の終わりを劃するという側面もある。問題は深い。



「石山寺縁起絵巻」第3巻（重文、部分、石山寺蔵）。夢を見ているのは『更級日記』の記主、菅原孝標女。簾（すだれ）からのぞく僧侶の手は夢

夢の日本化

わたしが当初興味をもったのは、フキダシの出る場所をめぐる日本的特徴である。日本のフキダシの発想は、中国版本の挿絵などからえているようなのだが、中国では、フキダシを頭頂から噴出させるのが定番である。ところが、『帝鑑図説』など、それを完全になぞった日本の絵では、フキダシの先は微妙にずれ、後頭部の方に流れて描かれる。江戸時代の絵を見ると、夢のフキダシは、口・喉のあたりや、胸の辺にも散在する。その意味は、絵画史だけではなく、魂や精神の所在をめぐって、日本の信仰の問題と密接にかかわる。

夢と表象――国際的な拡がりへ

しかし、ひとたび比較文化史的に眼を向けようとすると、途方もない対象が広がっている。本誌が刊行される直前の二月に、ハイデルベルク大学で、アンナ・アンドレーワ氏の企画による夢と託宣をめぐる国際ワークショップに参加するが、発表題目を眺めると、人類学的考察に始まって、メソポタミア、エジプト、アラビア、ユダヤ、ヒマラヤ、古代中国、そして日本の古典文学や中世思想の夢など広範な地域を捉える。今回は発表者がいないが、母マーヤーが見たブッダ託胎の夢など、インドの夢もとりわけ重要である。

そもそも「夢学（oneirology）」は、夢という現象の解明に向けて、科学総体をかけてなされるものだ。人文学においても、世界中におよぶ宗教と文化現象一般にかかわり、派生する問題は複雑である。英語圏でもあまたの著作があり、非力なわたしにはそろそろ荷が重いテーマだとわかっている。せめて日本の独自性を俯瞰して、バトンを繋ぐ必要もある。そこで二〇一一年から、「夢と表象――メディア・歴史・文化」という、国際日本文化研究センターの共同研究会をおこなってきた。一四年度は、その成果を論集としてまとめるとともに、国際研究集会を計画している。夢研究の潮流に、ささやかな寄与を遂げることをひそかに夢想するばかりである。

「風流十二季の栄花」第一図（国際日本文化研究センター蔵）

夢と心理学
――夢は合わせがら

河東仁（かわとう まさし）　立教大学教授

二〇年ほど前、あるカウンセラーから、次に紹介する夢の解釈をめぐって意見を求められた。夢見手は高校一年の女子、主訴は通学電車での目眩（めまい）である。

「渦に飲み込まれそう。すごく怖い。でもなかには、理想的な世界が広がっている。」

相反する想いが交錯しているが、夢であるだけに、矛盾し意味不明であるのも当然かもしれない。しかし何かのメッセージがありそうでもある。そのため夢は、古今東西、人びとを惹き付け、さまざまな解釈法が考案されてきた。そのひとつに、前世紀が始まる直前に誕生した深層心理学がある。

そこで右の夢を、まずはS・フロイト（一八五六―一九三九）、ついでC・G・ユング（一八七五―一九六一）の説に即して解釈してみたい。

「源氏物語手鑑　須磨 一」土佐光吉筆（和泉市久保惣記念美術館蔵。「源氏物語手鑑」の重要文化財指定を記念した展覧会を同館にて2014年3月30日（日）まで開催。会期中展示替えあり）

フロイト的な夢解釈

子どもは三歳ごろに性差を意識しだすと、異性の親への性愛的な欲動が生じ、同性の親には憎しみの念をおぼえる。そしてこの錯綜した感情や観念の絡まりは、六歳ごろまでに無意識のなかへ抑圧される。だがその後も、さまざまな状況で意識に干渉してくる。いわゆるエディプス（エレクトラ）コンプレックスである。

この女子は、思春期にはいり、異性への関心が高まりつつある。だが今は、思春期特有の心身が不安定な状態のなかで、右のエレクトラ・コンプレックスが活性化している。そして異性の親に対する性愛的な欲動と、それに対する忌避感とが同時に発現し、そのはざまで葛藤している。つまり理想的な世界はエレクトラ願望が充足される状態を意味し、渦に飲み込まれることへの恐れは、願望を充足することへの忌避感の置き換えである。したがって、やがて現実の異性と出会うことで、今の状況から脱却できるであろう。

ユング的な夢解釈

ではユング心理学的にはどう解釈されるだろう。

自我は、三歳ごろまでに萌芽的なものが形成され、三〇歳を過ぎたころ、一応の確立期を迎える。そしてそれまでは、母的存在から、また自我の《母胎》であった無意識から「自立」しようとする力と同時に、そのなかへ「退行」しようとする力のあいだで揺れ動く。自立することは、それまで自分を包み込んでいた存在から離脱し、善悪・正否・好悪などさまざまなことを主体的に判断し決定せねばならない、苦しみの道でもあるからである。

聖書をもちだすと、アダムとエバは、エデンの園であれこれ考える必要がなく、何の苦悩もなく暮らしていた。しかしまさに善悪を知る知恵の実を食べたため楽園から追放され、さまざまなことに苦しみながら生きる道が始まった。

あるいは新宗教の教祖の一人、北村サヨ（一九〇〇―六七）のことばを借りると、物事を知れば知るほど、つまり学問するほど、「我苦悶」して「陰照（インテリ）」になってゆく。それゆえ学問など捨てて無我になれば、苦しみから救われる。

右の夢は、まさしくこうした「楽園回帰願望」をめぐる内なる闘いをあらわしている。すなわち《母胎》に戻って、自立に伴われる苦悶から逃れたい。だがそれは自分が無になる、自我が解体されることでもある。それゆえ怖ろしい。そうした葛藤状況である。

以上、フロイトおよびユングによる深層心理学的な解釈を試みた。それでは、どちらが「正しい」のであろうか。

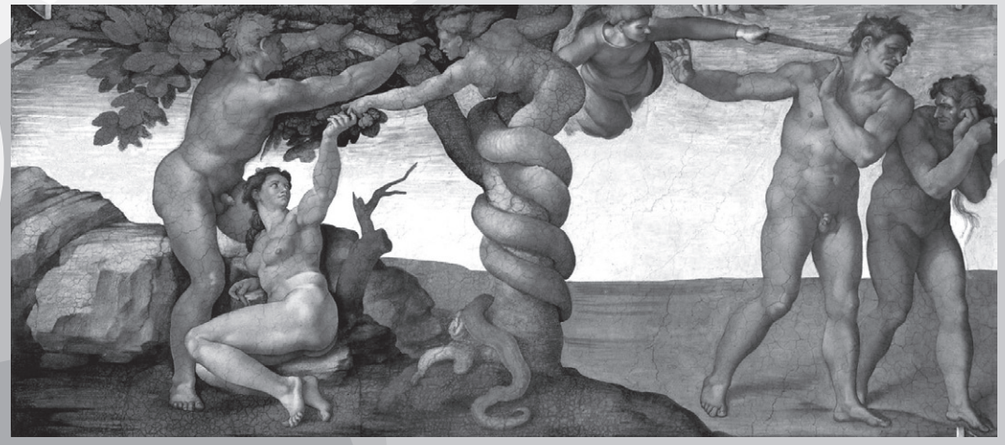
平安時代の夢解き

改めて指摘するまでもなく夢は多義包含的（polysemantic）であり、恐らくはどちらも「正しい」。さらには、昼間に生じた何らかの出来事が、この夢を形成したにすぎない、との解釈も成り立つ。さまざまな解釈が並立しうるのが夢の特性ということになろう。

とすると平安時代の夢解きなら、冒頭の高校女子の夢をどのように合わせた、つまり解釈したであろうか。それを夢想しながら、この稿を終わりにしたい。

光源氏の君は須磨の地にて、渦巻く波に憂い苦しむ違い目の日々を過ごされました。然しそののち栄華を極められました。

姫さまも、ここしばらく違い目の日々におられました。ご体調の不例、渦に飲み込まれるような目眩のお苦しみです。でもこの御夢が示されたからにはご安心ください。違い目は過ぎ去り、これからご境涯が大きく開けること必定です。御夢は、姫さまが宮中に入られる、つまり入内（じゅだい）されることを、御仏（みほとけ）が知らせ賜うたものに相違ございません。



ミケランジェロがシスティーナ礼拝堂に描いた天井画（部分）。
知恵の実を食べたアダムとエバの楽園追放が描かれている

見たい夢・見たくない夢

木村朗子　津田塾大学教授

みんな夢のなか

「夢で逢いましょう」「夢で逢えたら」などと流行歌にあるように、想い合う恋人同士なら夢のなかできっと逢瀬を遂げられるといわれている。

うたた寝に恋しき人を見てしより
夢てふ物はたのみそめてき　（古今集）

小野小町の有名なこの歌は、うたた寝の夢に恋人を見てからというもの、夢でその人に逢うことをひたすら願うようになったというものである。「思ひ寝の夢」ということばがある。心に思い続けていることを夢に見るというのなら、現代のわたしたちにも思いあたることがあろう。しかし前近代の人びとは、思うことを自分の夢に見るというだけでなく、深く思い詰めれば相手の夢のなかに自分がでてくると考えていた。

夢にても見ゆらんものを歎きつつ
うちぬるよゐの袖のけしきは　（新古今集）

式子内親王のこの歌は、あの人の冷たさを歎いているわたしの様子はあの人の夢にも見えているだろうというものだ。もの思いをしながら眠りにつくと寝ている間に魂が体を離れて飛んでいって、相手の夢に姿をあらわすのである。では相思相愛の恋人同士の夢の場合、どちらの魂が飛んで行ったと考えたらよいのだろうか。

そんなことを詠んだ歌もある。

君や来し我や行けむ思ほえず
夢かうつつか寝てかさめてか　（古今集）

あなたが訪ねてきたのかわたしが行ったのかわからない。夢だったのか現実だったのか。寝ていたのか目覚めていたのか。

夢は告げる

自分の思いが自分の夢にあらわれるだけではなくて相手の夢にも出てきてしまうとするならば、たとえば夫に隠れて浮気な恋をしているときなどはちょっと困ったことになってしまう。『源氏物語』で夫の伊予介が留守のすきに光源氏と関係をもった空蝉は「常はすくすくしく心づきなしと思ひあなづる伊予の方思ひやられて、夢に見ゆらむとそらおそろしくつつまし」として、気に染まない結婚相手で軽蔑さえしていた夫のことを思いやりながら、夫を思い出したばっかりに夫の夢に出てしまうのではないかと心配している。

そのように考えるならば、わたしたちの夢にあらわれた出来事は、なにかを知らせてくれる夢告であり、神の託宣であり、仏神の化現する場でもあるということになる。だから夢はしばしば重大な予言となることがあり、夢解きに意味をといてもらう必要があるのだし、もしよからぬ未来を告げる夢なら夢違えというまじないによって良い方へ曲げてもらわねばならない。

鎌倉時代に書かれた『我身にたどる姫君』という物語には、かつての恋人に胸を圧される夢を見た前斎宮が夢解きをしてもらうくだりがある。貴族社会で占いやまじないを担っていたのは僧侶や陰陽師などであったが、評判が高ければ市井の巫女にも頼ることがあった。ここで前斎宮の夢を解くのは、鼓を打ちながら占いする巫女である。前斎宮に不例のつづくのは、心変わりを恨んだ元恋人が藁人形に釘を七本も打ち込んでいるからだという。ちなみにこの前斎宮を呪う元恋人とは彼女に仕えている女房である。女性同士の痴情のもつれを描いた作品としても興味深いのだが、それはまた別の話。

悪意の情念が夢にあらわれればそれは呪いとなる。悪夢を見たとき、わたしたちは人に話すことで正夢とならぬように流してしまおうとする。逆に吉夢なら叶うまでは秘匿しておこうとする。初夢でその年の運勢を占ったりもする。どうやらわたしたちは夢のマジカルなパワーを今なお信じ続けているのである。

鼓を打つ巫女。「年中行事絵巻」巻3「闘鶏、蹴鞠」より（部分、田中家蔵、『日本絵巻大成第8巻 年中行事絵巻』中央公論新社、1977年より転載）

インド、移動民社会の夢見

岩谷彩子　広島大学准教授

野営中のヴァギリ（インド、タミル・ナードゥ州）

夢を語り合う

夢を語り合う人びと

インドに夢を語り合う共同体がある、というと、ただでさえ神秘のイメージが強いインドに対するエキゾチシズムを必要以上にかきたてるように思われるかもしれない。しかし、わたしがヴァギリ（Vaghri）という人びとと一緒に二〇〇〇年前後に南インドで生活し、日々耳にしたのは、まぎれもなく彼らが眠っているときに見たという夢の話であった。

夢のお告げに対する信仰

インドには、夢のお告げを重視する文化が存在してきた。二〇一三年一〇月にも、ヒンドゥー教の修行者が見たという夢をきっかけに、インド北部で政府の考古学調査機関が約一か月間、金などの財宝を発掘しようと試みニュースになった。残念ながら財宝は発掘されず、どうやら修行者に対するある政府の高官の信仰の篤さが高じた出来事だったようだ。この事例からわかるように、現在でもインドでは夢はお告げや予言とみなされており、夢がきっかけとなって神に仕えるようになる民間宗教者も多い。他方で、急速に市場経済化が進む今日のインドでは、夢を日常的に語ったりその意味を考えたりする機会はきわめて少なくなっている。

共同体をかたどる夢

これに対してヴァギリは、傍から見るとまったく取るに足らないような夢を日常的に語り合っていた。それはわたしたちが見る夢のように、何気ない生活の断片のような内容が多く、彼らと生活するようになるまでそれが夢の話であることもわからなかったほどだ。しかし、一九七〇年代ごろまで土地をもたず移動生活を送り、狩猟採集や行商で生活してきたヴァギリが語る夢は、変化に富み流動的な彼らの社会をまとめあげる役割を果たしていた。夢には、彼らが移動先で出会うさまざまな存在が登場する。夢にあらわれた「他者」の大半は、夢が他のヴァギリに語られる過程で彼らの氏族神とされ、神が空腹を抱え儀礼の実施を求めていると解釈されていた。土地をもたず社会のニッチに需要を見出し生計を立ててきた彼らにとって、「外部」の資源を「内部」のそれに転換することは、夢のなかでもおこなわれている。夢にあらわれる外部的な存在を彼らは自分たちの氏族神とみなし、儀礼をとおして社会秩序の中核にしていく。ヴァギリにとって、「われわれ」と「彼ら」という共同体の境界はあらかじめ引かれているわけではない。それは常に「彼ら」との接触と交渉のなかで生起するものである。この移動民ならではの哲学が彼らの夢見の実践に結晶化されていたのである。

彼らと生活をともにするなかで、彼らの夢にわたしもたびたび登場し、わたしの夢にも彼らが登場した。覚醒時のみならず夢でも交渉を繰り返しながら、異質なものを取り込んで自己を作っていく。人類学的フィールドワークは、そんな核心的な営みでもあるのである。

脳の信号から夢を可視化する

神谷（かみたに） 之康（ゆきやす）
ATR 脳情報研究所神経情報学研究室室長

できるわけがない？

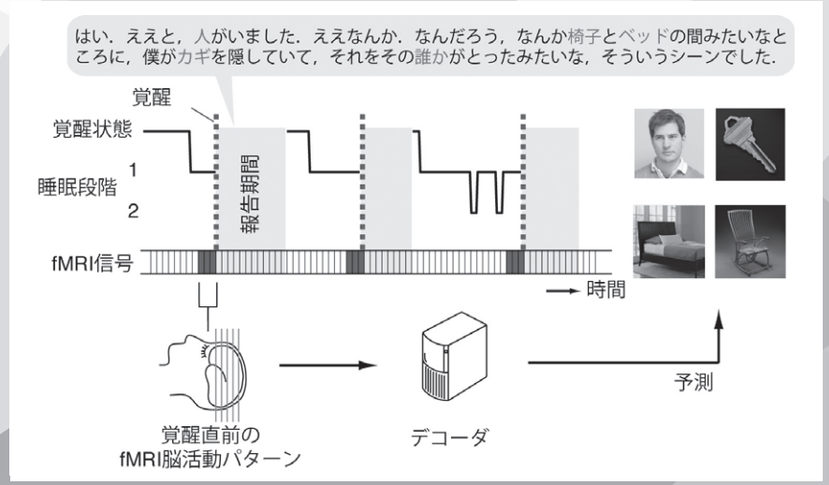
数ヶ月前、フジテレビのドラマ『ガリレオ』を見ていたら、福山雅治演じる主人公の湯川が「脳からイメージを可視化するなんて今の科学でできるわけがない」と語るシーンがあった。わたしは苦笑せずにいられなかった。というのも、「脳からのイメージの可視化」こそわたしの研究室が取り組んでいる研究のテーマであり、ちょうどその二週間前に、科学誌『サイエンス』に、脳から夢の内容を解読することに成功した論文を発表したばかりだったからだ。われわれの成果が世のなかで受け入れられていないことを残念に感じる一方、テレビドラマですら荒唐無稽と扱われるテーマを研究していることをすこし誇らしく思った。

ブレイン・デコーディング

夢は主観的な現象であり、本人にしか体験することができない。夢を可視化するといっても、本人になり代わって体験することはできない。われわれのアプローチは、「どのような画像を見ているときと似た脳の状態にあるか」を調べることで、睡眠中の脳のデータから夢の内容を推測するものである。

そのために、被験者にまずたくさんの画像を見てもらい、そのときの脳の活動パターンをMRIという脳をスキャンする装置を使って記録する。このデータを使って、脳のデータから画像への「翻訳機」を作る。この翻訳機の作成には、コンピュータにデータから自動的にパターンやルールを学習させる「機械学習」という技術を用いる。機械学習は、現在活発な研究が進められているコンピュータサイエンスの分野で、スパムメールの判別や音声や画像の自動認識などインターネットや情報通信に欠かせない技術である。この方法を使って脳の信号を解析することで、肉眼ではわからない微細な信号パターンから情報を抽出することができるのである。われわれのこのアプローチは「ブレイン・デコーディング」とよばれている。

「翻訳機」が解読した夢内容の例。文字の大きさと合成画像が、関連する物体のカテゴリーを表現



実験のプロセスをあらわした図。夢を見ているときに特徴的にあらわれる脳波を検出したら覚醒させ、夢の内容を語ってもらう。この手続きを繰り返す

MRI装置。夢の解読に用いたもの

実験風景。MRIの制御室で脳波から睡眠状態をモニターしている

夢の脳科学

夢は古来、その機能や内容の解釈について多くの人びとの関心を集めてきた。フロイトは夢を「抑圧された願望の充足」とみなし、夢の報告内容の解釈を精神分析の重要な手法として位置づけた。一方、一九五三年に睡眠中の急速眼球運動（Rapid Eye Movement REM）の出現が発見され、REM期間中に覚醒させると頻繁に夢の報告がえられることが確認されると、睡眠中の眼球運動や脳波など客観的な指標と夢の関係が議論されるようになった。

一九七七年にはホブソンらが、REM睡眠中に脳幹からランダムに投射される信号が大脳を活性化しイメージが合成されることで夢が生じる、とする「活性化合成仮説」を提唱し、精神分析学的な夢解釈を激しく批判した。その後の研究から、REMや脳幹からの信号は夢見にとって必須の条件でないことが示されているが、近年の脳計測技術の進歩によって睡眠中の脳活動の詳細が明らかになってきた。

夢の機能の解明に向けて

では、夢は何のために見るのだろうか？危機的な状況に対するシミュレーション、記憶の定着と整理、情動反応の中和などさまざまな仮説が提案されているが、現代の科学はまだ明確な答えをもっていない。科学者の関心は、「夢の機能」よりも「REM睡眠の機能」など客観的に扱える問題にあえてとどまっていたようにも思える。

夢の機能を理解するためには、夢の具体的な内容と脳や行動との関係を知ることが必要である。われわれが開発した夢の解読法は、元来主観的な夢の内容を客観的に扱うことを可能にする。これを用いて夢の機能を明らかにすることがわたしの「夢」である。

似たモノさがし

似てるけどどこか違う
似てないようでどこか似てる
いろんな工夫や思いを映す
みんぱくの所蔵資料

ドリーム・タイム

山中 由里子（やまなか ゆりこ） 民博 民族文化研究部

オーストラリアの先住民アボリジニは創世の時代のことを「ドリーム・タイム」といい、「ドリーミング」とよばれる創世の物語を語り、描いた❶❷。その語りと絵は、人間と自然の特別な関係を体験する装置であり、部族内で伝承されてきた絵の「内側」は部外者に公開されるべきではないとされた。例えば、一見、抽象的な点描画のように見える絵には、精霊の旅の動きがあらわされている。精霊が動いた太古の時間が、ドリーミングによって目の前に体現されるのである。

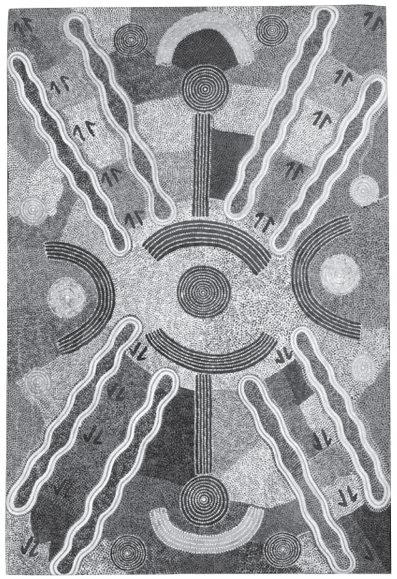
ドリーミングのように、日常的な時間認識を超越した体験をあらわす、時空を超えた次元へのポータルとしてのイメージは、他の文化にも見られる。

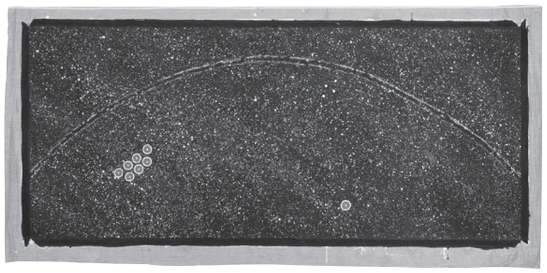
カナダ北西海岸先住民クワクワカワクゥの早変わり仮面も、世界の成立の秘密を、遠い過去のこととしてではなく、「今ここにある」ものとして現出させるモノである❺。演者はこの仮面をつけたパフォーマンスによって、神話の世界（外側の動物の姿）と現実の世界（開いたときにあらわれる人間の姿）を往来する。神話の世界は現実世界とパラレルに存在する原初の世界であり、変身仮面はそのふたつのあいだを移動するための手段である。

早変わり仮面やドリーミングと同様に、そのイメージを構成する要素の意味が部外者には容易に明かされないのは、密教芸術であるマンダラである❻。宇宙（あるいは自然）と自己が一体であることを実践するための道具という点においても類似した機能をもつ。立川武蔵（たちかわ むさし）は、マンダラとは『聖なる』時間のなかでマンダラにおける仏や菩薩の姿を感得した者が、そのときのあり様を布地等の上に描いたもの」であると書いている。マンダラもまた、一直線上に進む時間とは違う時間をかたどったもののようだ。

これらの資料は「イメージの力」展（国立新美術館で六月九日まで開催）の「時間をかたどる」というセクションで展示中である。描かれた「聖なる時間」の深層に立ち入ることは、それを造った人びとの記憶や情緒的価値、あるいは精神的な鍛練を共有しない者には本来は許されない。しかしこれらの絵図がずらりと並ぶことも稀（まれ）である。「なぜ、今ここに、我々はいるのか？ なぜ、世界がそこにあるのか？」という根源的な問いを人類がどうしてこのように表現してきたのかを夢想する、またとない機会である。

❶

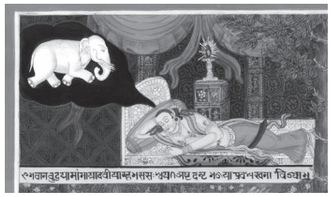




❷

❺

❸



❹

❻

❶砂絵のキャンバス画「ワラビー・ドリーミングの儀礼」、オーストラリア、制作者：ドン・チュンガライィ、民族：オーストラリア・アボリジニ、縦 121.4 × 横 180 cm、H0085768
中央の円形であらわされるキャンプ地に集まるカンガルーの姿の精霊の旅が描かれている

❷砂絵のキャンバス画「ミルキー・ウェイ・ドリーミング」、オーストラリア、制作者：ノラ・ナパイジャリ・ネルソン、民族：オーストラリア・アボリジニ、縦 114.2 × 横 232 cm、H0180886
夜空の銀河を舞台にした七人姉妹と、姉妹を追う男の物語が描かれている

❸毛糸絵「太鼓の儀礼」、メキシコ、制作者：エリヒオ・カリジョ・ビセンテ、民族：ウィチョル、縦 122.1 x 横 244.3 cm、H0160553
毛糸絵は聖なる物語や神話上の出来事を表現している。ここに描かれているのは太鼓の儀

❹仏伝図、ネパール、制作者：ガウタマ・ラトナ・ヴァジュラーチャーリヤ、民族：ネワール、縦 68.8 x 横 51.5cm、H0117960
釈迦の母マヤが白い象の夢を見て懐妊する場面が左上に描かれている

❺早変わり仮面、カナダ、制作者：リチャード・ハント、民族：クワクワカワクゥ、幅 47.8 x 奥行 68.3 x 高さ 30.1cm ※閉じた状態、H0009195
仮面の外側はワタリガラスで、くちばしを開くと内側にはシシウトルというヘビに似た双頭の海の怪物が描かれ、その体はヒトの顔になっている

❻砂絵マンダラ、ネパール、制作者：ロプサン・バズラチャルヤ、テンジン・ラマ、トゥプテン・ラマ、サムテン・ラマ、縦 140.0 x 横 140.0 cm、H0275394

展示場新構築のお知らせ

朝鮮半島の文化・中国地域の文化・日本の文化「沖縄のくらし・多みんぞくニホン」の展示場が3月20日（木）に新しくオープン！

人間文化研究機構第23回公開講演会・シンポジウム
「高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方」
高齢期のウェルビーイングに配慮した多様な住空間構想が、すべての人にとって住み心地のよい、地域文化を活かしたコミュニティを育てゆく可能性と道筋について考えます。
日時　3月8日（土）13時～17時20分
会場　イイノホール
（東京都千代田区内幸町2－1－1）
※要事前申込、参加無料、手話通訳あり

公開講演会
「働き者と、ナマケモノ!?
――『はたらきかた』文化論」
働き者はどこにいるのでしょうか。高度福祉国家フィンランドにおける事例、成果の不確実性がつねに大きいカツオ釣り漁業者の事例などから、「はたらきかた」を文化としてとりあげます。
日時　3月20日（木）18時30分～20時45分
会場　オーバルホール
（大阪市北区梅田3－4－5
毎日新聞社ビルB1）
※要事前申込、参加無料、参加証必要
お申し込み・お問い合わせ先
本館　研究協力係
電話　06・6878・8209

記念シンポジウム
金沢大学文化資源学シンポジウム「文化資源学がめざすもの――研究・教育・国際貢献」
金沢大学と東京文化財研究所、本館との連携協定を記念して、「文化資源学」がめざすものについて意見を交わします。
日時　3月23日（日）13時30分～16時30分
会場　学際総合センター2階中会議場
（東京都千代田区一ツ橋2－1－2）
お申込み・お問い合わせ先
金沢大学人間社会系事務部総務課総務係
n-somu@adm.kanazawa-u.ac.jp

国際シンポジウム
「個人・家族・国家のゆくえ――文化人類学と人口学からの学際的アプローチ」
今日のサハラ以南アフリカ地域における個人と家族、国家が直面する課題を検討します。
日時　3月1日（土）10時～17時30分
3月2日（日）9時～16時30分
会場　本館第4セミナー室
※要事前申込、参加無料、日仏同時通訳あり
お申し込み・お問い合わせ先
三島研究室　mishima@idc.minpaku.ac.jp

公開シンポジウム
「災害と展示」
災害に対し展示はどうあるべきか、あるいは災害に強い展示とはどのようなものか、これまでの事例から検討します。
日時　3月16日（日）13時～16時25分
会場　本館第5セミナー室（定員80名）
※申込不要、参加無料
お問い合わせ先
日高研究室　s-hidaka@idc.minpaku.ac.jp

「片倉もとこ先生をフィールド・ワークする」
アラビア遊牧民をはじめとするイスラーム研究を中心に、文化人類学、比較文明学等の幅広い分野で国際的に活躍された先生の軌跡を振り返り、それを一層発展させます。
日時　3月29日（土）13時30分～17時
会場　本館第5セミナー室（定員80名）
※申込不要、参加無料
お問い合わせ先
名誉教授室　yoshimura@idc.minpaku.ac.jp

「伝統と創意――台湾原住民族工芸の現在」
本館の新しくなる「東アジア展示場」に展示する台湾の原住民族衣装を制作したタイヤル族、パイワン族の工芸作家、そしてプユマ族の研究者をお招きし、原住民族の工芸についてお話しいただきます。
日時　3月30日（日）13時20分～16時45分
（開場13時）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料

みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ
「人生はビギナーズ」
75歳にして同性愛者だとカミングアウトし、短い余生を思うままに生きる父と、自分自身に自信が持てない息子との交流を描いた作品を通して、これまでの家族形態における同性愛者の存在と人間関係、これからの新しい家族の在り方を考えます。
日時　3月16日（日）13時30分～16時30分
（開場13時）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

みんぱくミュージアムパートナーズ
「点字体験ワークショップ」
日時　3月8日（土）12時～15時30分
会場　本館エントランスホール
※当日随時受付、参加無料

地球おはなし村
「おはなし、おはなし～西アフリカの昔話をかたる～」
日時　3月16日（日）13時30分～14時
会場　本館エントランスホール
※当日受付、参加無料

●研究公演等参加方法変更のお知らせ
4月から、研究公演、みんぱく映画会、みんぱくワールドシネマにご参加いただく際、当館の観覧券のご提示をお願いすることといたしました。観覧券は、当館観覧券売場または自然文化園各ゲート脇の券売機等にてお買い求めください。
なお、みんぱくフリーパス、国立民族学博物館友の会会員証、キャンパスメンバーズの学生証等をお持ちの方は、ご提示いただくと、観覧券は不要です。

●展示場リニューアル工事のお知らせ
展示場リニューアル工事のため、朝鮮半島の文化・中国地域の文化・日本の文化（沖縄のくらし）が閉鎖されます。
期間　3月19日（水）まで

●無料観覧日のお知らせ
3月16日（日）は万博公園ふれあいの日のため本館展示を無料で観覧いただけます。
※各イベントについてくわしくはホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時から17時（土日祝を除く）です。

国立民族学博物館創設40周年記念
日本文化人類学会50周年記念
「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」
迫りくる力、驚きとの出会い、このアートを体験しよう
会期　2月19日（水）～6月9日（月）
会場　国立新美術館　企画展示室2E（東京）
ワークショップも開催予定。詳しくは、国立新美術館のホームページをご覧ください。
http://www.nact.jp/
＊
「渋沢敬三記念事業
屋根裏部屋の博物館――Attic Museum」
会期　3月21日（金・祝）～5月6日（火・振休）
会場　埼玉県立歴史と民俗の博物館

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は観覧料が必要です）

第430回　3月15日（土）
装いのセンスと伝承――中国のフィールドから
講師　横山廣子（国立民族学博物館 准教授）
中国雲南省では、さまざまな民族衣装を目にします。日常的に着る人は減少していますが、民族衣装は大切にされています。変化しつつ伝承され、洗練されてきた装いのセンスが、色合い、形、装飾、そして何より着方にあらわれます。それを紹介し、伝承がどのようにおこなわれるのかも考えてみます。

大理白族自治州のイ族（1990年撮影）

第431回　4月19日（土）
世界の華僑・華人と〝故郷〟
講師　陳天璽（早稲田大学 准教授・本館 特別客員教員）
中国国外に居住する中国系は華僑・華人と呼ばれており、4000万人以上いるとみられています。世界に根を下ろしながらも中国の伝統文化を守り続けている人びともいれば、異民族との通婚や世代交代により独特な複合文化を形成している人びともいます。そんな彼らの多彩な日常生活から、〝故郷〟とのかかわりについてみていきます。

東南アジア華僑が故郷の家族に宛てた手紙

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　国立民族学博物館 第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第430回　4月5日（土）14時～15時
【新 中国地域の文化展示より】
中国最大の少数民族、チワン（壮）族の現在
講師　塚田誠之（国立民族学博物館 教授）
新しい展示では、中国地域には漢族の文化以外にもさまざまな民族の豊かな文化が見られることを紹介しています。その中からとくに多くの民族がくらす中国南部の少数民族、チワン（壮）族を事例にお話しします。彼らの伝統的な高床式住居のくらしや年中行事を紹介するとともに、国境地域にくらす人びとが、国境を越えてベトナム側の同系民族と交流をおこないネットワークを築いていることにも注目してみます。

第431回　5月3日（土）14時～15時
【新 中国地域の文化展示より】
漢族はなぜ家族を大切にするのか
講師　韓敏（国立民族学博物館 教授）

東京講演会
会場　国立新美術館研修室A・B
定員　60名（要事前申込）

第108回　3月9日（日）13時半～14時15分
国立新美術館での「イメージの力」展開催にあたって
講師　須藤健一（国立民族学博物館 館長）
「イメージの力」展は本館所蔵の34万点の標本資料から「美的基準」にもとづいて約600点を選りだしました。美術館の展示はアート、民族学博物館のものは民族資料と言われてきました。今回は民博コレクションを国立新美術館で披露する試みです。みなさん、世界各地の住人が創りだした多種多様な造形物のなかに「美しさ」や「アート」を発見する楽しみを味わってください。本講演は、「美の普遍性」に思いをめぐらすことにします。
※講演会終了後に、国立新美術館研究員による展示概要の解説（30分）もおこないます。

国立民族学博物館
ミュージアム・
ショップ

電話　06-6876-3112
FAX　06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

よい夢お届けいたします。
気温も暖かくなり、心地よい眠りに誘われる季節となりました。そこでご紹介するのがドリームキャッチャー。もともとは、北米先住民オジブワの人びとのあいだに伝わるお守り。輪のなかに張り巡らされた、蜘蛛の巣状のネットに悪い夢は絡め取られ、よい夢だけが眠る人にやってくるといわれています。今回のドリームキャッチャーは、カナダのバンクーバーよりお届けします。ベッドでの熟睡から机の上のうたた寝まで、よい夢を届けるドリームキャッチャーをそばに置きませんか。

ドリームキャッチャー
3200円
※価格は税抜きです。

地球ミュージアム紀行

未来世紀のミュージアム

「おたから」の陳列から、さまざまな人びととの対話によりつくられる展示へ。
ミュージアムに期待される機能や役割は、時とともに変わっていく。
これからミュージアムはどのように変化していくのだろうか。

野林（のばやし） 厚志（あつし）
民博 研究戦略センター

二〇××年のみんぱく

それにしても、今の資料検索は昔にくらべて格段に進歩している。世界各地の博物館がオンラインで結ばれていて、相互のデータベースの横断検索なんて当たり前である。借用したい資料がどんな形やサイズかはそれぞれの博物館が提供している三次元の計測データを利用すればわかるので、3D設計ソフトで展示場の立体配置をデザインできるし、3Dプリンターで出力すれば、資料の立体像がプリントアウトできるから、演示の方法だってあらかじめ考えておける。そうそう、二〇年前に常設展示のリニューアルをしたときには、まだ二次元の設計図が主流で、実際に展示してみるとずいぶん考えていたことと違ってしまって、修正する、いや修正しないでずいぶん議論したことがあった。今では考えられないことである。と書いている間に、国立台湾博物館と順益台湾原住民博物館が所蔵しているタイヤル族の貝製ビーズで装飾された上衣がプリントアウトされてきた。3Dプリンターで出力したものなので表面の形状や色彩、大きさはほぼ把握できる。これでまずは展示のシミュレーションをしてみよう。

未来への遺産

十数年後に筆者がまだ博物館に職をえていることを想定し、展示会の準備の様子を想像してみた。夢のような話に思われるだろうか、それとも近い将来の現実ととらえることができるだろうか。現実に3Dプリンターの実用化は進んでいる。博物館資料の内部構造も含めた三次元データをとることを目的としたCTスキャナーを導入している博物館も存在する。データベースの横断検索も技術的には何ら問題はなく、メタデータの設定やデータの属性をどのように関連づけていくのかという、むしろ資料を扱う方法論が問題とされているのが現状である。高度情報社会における博物館や美術館はその対応にせまられている。博物館は博情館でもあるという民博もそれに対応することに日々追われている。今の時代の博物館は、ものを収集し、保管し、展示する場所であることはもちろんのことだが、人びとが集い、体験を共有し、情報を発信する拠点として強く期待されている。いや、ミュージアムという名のもとで、ものにこだわる意識が薄れてきたようにさえ感じられてしまうのである。

あしかけ七年間、連載してきた「地球ミュージアム紀行」で紹介した博物館や美術館は八〇館以上。長い伝統をもつ博物館もあれば、個人のささやかな思いで作られた資料館等、その規模やかたちはさまざまであった。そこに共通していたのは、ものがあり、それを見た人、手にした人たちが紛れもない現実として存在するということである。執筆者たちはいわばその存在の証人たちであろう。実際に足をはこび、展示を観覧し、関係者と話した事実がこの連載で積み重ねられてきたと言ってもよい。二一世紀初頭の世界の博物館事情にかかわる貴重な証言を「地球ミュージアム紀行」は遺してくれたようである。

本コーナーで取り上げた各地のミュージアム

オセアニア

オーストラリア
- パワーハウス博物館　08年7月号
- オーストラリア華人歴史博物館　13年6月号

ニュージーランド
- オークランド博物館　07年9月号

アメリカ

アメリカ合衆国
- エクスプロラトリウム　07年12月号
- 楽器博物館　08年8月号
- 国立アメリカ・インディアン博物館　09年1月号
- セックス・ミュージアム　09年3月号
- ルイジアナ州立博物館　11年8月号
- 北アリゾナ博物館　13年12月号
- ネブラスカ大学付属キルト研究センター・博物館　13年9月号

カナダ
- ウミスタ文化センター　10年3月号

グアテマラ
- ラビナル・アチ・コミュニティ・ミュージアム　12年1月号

セントクリストファー・ネイビス
- セントキッツ博物館　09年4月号

チリ
- チリ国立美術館　11年11月号

メキシコ
- ソコヌスコ地方博物館　08年3月号

ヨーロッパ

イギリス
- ヴィクトリア＆アルバート美術館　08年9月号

オランダ
- トロッペン博物館　08年11月号
- テイラー博物館　12年6月号

スペイン
- ハムの博物館　09年9月号

ドイツ
- ハイデルベルク民族博物館　07年7月号
- ダイアローグ・イン・ザ・ダーク　11年3月号
- ライプツィッヒ民族学博物館　11年10月号
- 数学博物館　12年10月号

フィンランド
- 郵便博物館　11年12月号
- 国立諸文化博物館　12年11月号

フランス
- エロティシズム・ミュージアム　09年3月号
- ピラミッド博物館　09年10月号
- リヨン市立レジスタンス・強制移送史センター　12年2月号
- 国立移民史博物館（シテ）　12年7月号

ブルガリア
- ヨーグルト博物館　09年11月号

マケドニア
- マケドニア博物館　13年2月号

アフリカ

エチオピア
- シェリフ・ハラール博物館　13年4月号

タンザニア
- スクマ博物館　13年5月号

ナイジェリア
- ラゴス現代美術センター　10年1月号

マダガスカル
- トゥアリラ大学附属博物館　14年2月号

南アフリカ共和国
- アパルトヘイト博物館　07年6月号
- ヘクター・ピーターソン博物館　07年6月号

西アジア

エジプト
- 大エジプト博物館保存修復センター　11年4月号

ヨルダン
- 死海資料館／死海博物館　07年5月号
- 〃　08年12月号
- カラク考古博物館　08年12月号
- 国立ヨルダン博物館　08年12月号
- サルト歴史資料館　08年12月号

レバノン
- 石けん博物館　12年8月号
- ドゥッパーネ邸　12年8月号

南アジア

インド
- ニューデリーの寺院・廟墓・史跡　07年8月号
- マイナ・マハル博物館　08年2月号
- サンスクリティ博物館群　09年12月号
- スワーミーナーラーヤン・アクシャルダム寺院　10年12月号
- アンダマン人類学博物館　13年11月号

東南アジア

インドネシア
- インドネシア国立政策移民博物館　08年6月号
- スティア・ダルマ仮面と操り人形の家　14年1月号

ベトナム
- ベトナム民族学博物館　07年10月号
- ベトナム革命博物館　09年6月号

中央・北アジア

カザフスタン
- カヌシ・サトバエフ博物館　13年3月号

モンゴル
- エルデニ・ゾー博物館　13年1月号

ロシア
- ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館　12年12月号

東アジア

韓国
- 大韓民国歴史博物館　13年10月号

台湾
- 国立故宮博物院　08年5月号
- 〃　12年3月号
- 順益台湾原住民博物館　08年5月号
- 台湾故事館　10年9月号
- 新竹市立動物園　12年4月号
- 国立台湾歴史博物館　13年8月号

中国
- 三江トン族博物館　07年11月号
- 生態博物館　08年4月号
- 広西民族博物館　09年8月号
- 広東民間工芸博物館　10年7月号
- 寧波滕頭実践例館　11年1月号

日本
- 長崎歴史文化博物館　08年1月号
- 神奈川県立近代美術館　08年10月号
- 鹿児島純心女子大学附属博物館　09年2月号
- 神奈川県立地球市民かながわプラザ・あーすぷらざ　09年5月号
- 兵庫県立美術館　09年7月号
- 東北学院大学博物館　10年2月号
- 水の歴史館　10年4月号
- 恩納村博物館　10年5月号
- アイヌ民族博物館　10年6月号
- 正倉院　10年8月号
- 水俣病歴史考証館　10年10月号
- 国立民族学博物館　10年11月号
- 日本の鬼の交流博物館　11年2月号
- 野島断層保存館　11年6月号
- 海洋文化館　11年7月号
- トヨタテクノミュージアム産業技術記念館　12年9月号
- 小浜民俗資料館　13年7月号

多文化をあきなう

さをり織りで、記憶を紡ぐ、歴史を紡ぐ

東山高志（ひがしやまたかし）　ツナミクラフト代表

タイや日本の被災地で、女性たちが織る「さをり織り」。「ものづくり」や「あきない」を超えて、人びとの「記憶」まで織り込んでいくようである。そこにフェアトレードがくわわるとき、さらなる人と人との結びつきが生まれる。

さをり織りで心のケア

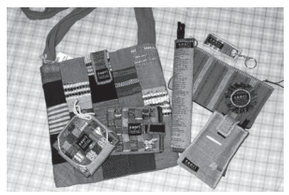
赤色、黄色、水色など、鮮やかな糸を手に取り、一〇人ほどの女性たちが風とおしのいい大きな屋根の下で楽しげに織り機に糸をとおしている。彼女たちは、二〇〇四年インド洋大津波の被災者である。笑顔にあふれる職場では、困難があったことなどみじんも感じない。

ここは「さをりセンター」。タイ南部の観光地プーケットから車で二時間離れた場所にある。さをり織りという日本を起源とする織物で、小物やバッグなどに加工をしている。さをり織りは今から四〇年ほど前に大阪の女性、城（じょう）みさを（一九一三―）が考案した現代手織りで、簡易な織機を用いて誰でも簡単に自由に織れるのが特徴だ。障害者が才能を発揮することが多く、趣味の世界だけでなく福祉の世界で普及している。

タイでは、一九九七年の「アジア太平洋障害者の十年」バンコク会議の展示で注目され、二〇〇二―二〇〇五年にJICA（国際協力機構）によりタイ北部にて知的障害者と山岳少数民族の雇用促進プロジェクトのなかで導入された。そのことを知ったあるタイ寺院の日本人住職光男ガヴェサコー師は、さをり織りに瞑想（めいそう）と同様の効果があることを見出し、自らの寺に研修用として導入した。その矢先に大津波が発生、被災者の「仕事がしたい」という声を聞き、津波から一か月後に約三〇〇〇人が避難している避難所内で心のケア事業として織り始めた。

ツナミクラフトは二〇〇五年一一月に活動を開始した任意団体で、心のケアの活動を維持するための日本での流通を担当している。現在はセンター外のスタッフを含めると総勢五〇名がさをり織りで働いている。津波で子どもを亡くしたある女性は「子どもを津波で亡くし自分を責めたこともあったが、ここにいけば仲間もいるし、織ることが楽しい。収入は多くはないが、子どもと暮らし、学校に通わせることができる」と言う。今、彼女は津波後に生まれた子どもと暮らしている。

タイの津波被災地にさをり織りを持ち込んだ、タイ寺院住職、光男ガヴェサコー師



津波後3年目の2007年のタイの作品

タイの津波被災地のさをり織りの織り手さん

タイの経験を日本へ

さをり織りによる心のケアと仕事づくりは東日本大震災の被災地でもおこなわれている。ツナミクラフトでは震災の一か月後から準備を始めた。支援活動の資金となるようにと「PRAY FOR JAPAN」と書かれた、さをり織りのリストバンドがタイの被災者の手により作られ日本に届けられた。

インド洋大津波の経験から不便な場所ほど支援が必要だと学んだので、岩手県沿岸部を活動地域と定めた。地元の被災自営業者などの協力をえて、二〇一一年一〇月にようやく第一回の体験会を開催できた。当時は会場の確保も難しく、偶然に会場を提供していただいた若者の就労支援施設が会場となった。そこを利用するいわゆるニートといわれる若者たちがいちはやく技術を覚え、仮設住宅を巡回する活動の戦力となった。支援される立場が支援する立場となり、若者たちは元気を取り戻し社会に巣立っていった。彼らの功績もあり、二〇一三年末現在で岩手県宮古市、山田町だけで一〇か所の自主サークルが出来た。

「織物をしていると、そのときだけ津波のことを忘れることができる。仲間と織ることがなによりも楽しい。生きがいです」と宮古市在住の女性が語る。紛争や災害によるPTSDの問題を研究している東京外国語大学非常勤講師イザンベール真美の現地調査によると、さをり織りを始めると症状が緩和される傾向がみられるという。

開始当初、材料は支援品を使用したが、収益のでる持続的な活動とするために、NPO法人さをりひろばなどとともに「SAORIAS」ブランドとオリジナル商品「まいっかちゃん」を企画した。これらの製品は、新しい三陸の特産品となることを目指して「道の駅やまだ」などで販売をおこなっている。

被災者とともに生きるために

日本人は、被災者、被災地に対して腫れ物にでも触るかのような対応をする傾向がある。筆者がタイの津波被災地に入った理由は風評被害の実態調査だった。タイの津波被災地に日本人観光客だけが戻らないという現象が発生したためだ。

フェアトレードの仕事のひとつは、さまざまな困難とともに暮らす人たちとの接点を作ることだと考えている。その活動の一環として、織物と写真を融合させた共同作業「Cruise around Tsunami Havens」を企画した。これは東日本大震災一〇〇〇日目から新しいことを始め、一〇年後、二〇年後に繋（つな）げようという企画である。二〇一三年一二月四日に岩手県、宮城県、福島県で合計一〇本のたて糸をつくり、さまざまな地域を巡回しながら、インド洋大津波一〇周年、阪神大震災二〇周年の日に完成を目指す。たて糸をその地に生き続ける人びとに見立て、そのたて糸によこ糸をとおすことで接点を設け記憶を紡ぎ、布となることで歴史を表現しようという試みである。

被災地で織物が受け入れられるのは、人類と織物の何千年もの歴史が、織ることを通じて被災者の心によみがえるからだろう。

読者にお勧めしたいことがある。ぜひ、手織りの体験をして欲しい。人間が人間として歴史を重ねて生きていることを体感できるかもしれないから。

被災者がつくったたて糸にさまざまな人がよこ糸を入れ、携わった人の写真を織り込んでいく。織りつなぎワークショップにて

仮設住宅の集会所での心のケアを目的とした、さをり織り普及活動。ひとつの仮設住宅に対し5週連続で実施し、指導者やボランティアが行かなくても活動できる自主活動サークルづくりを支援する

タイの津波被災者たちが日本の復興のために作った「PRAY FOR JAPAN」リストバンドと岩手の津波被災者たちの製品化第一号の「まいっかちゃん」

フィールドで考える

退官寄稿

パゴダと軍事の国にあって

田村克己（たむらかつみ）
民博 民族社会研究部

遺跡めぐりは自転車で

わたしが四〇年近くフィールドとしてきたビルマ（ミャンマー）に、はじめて足を踏み入れたのは一九七七年のことであった。当時、鹿児島大学に勤めて間もないわたしは、ビルマ研究の先駆者である同大学の荻原弘明（おぎわらひろあき）先生（東洋史）の導きと励ましもあって、この未知の国の扉をたたくことになった。しかし、当時のビルマはネーウィン政権下の「ビルマ式社会主義」による一党独裁のもとにあり、潔癖なまでの非同盟中立政策をとって、外国に対してほぼ国を閉ざしており、まさに知られざる国であった。

三ヶ月の滞在中、荻原先生などから紹介されたビルマの人たちは、まだ本当にこの国の右も左もわからないわたしを親切にあちこちに連れて行き、また研究への道筋を示してくれた。そうしたなかで、ほぼ同じぐらいの二〇代後半の友人たちとの交流は楽しかった。なかでも、ある若手の写真家と一緒に、仏塔（パゴダ）や寺院の跡が無数といってよいほどに残っているパガン（バガン）遺跡を自転車で回ったことは、格別な思い出として残っている。当時は、遺跡の城壁内の村が南の郊外にあらたに作られたニューバガンに移転する前で、人びとの生活が遺跡のなかに溶け込んでいた。夏季の始まりの三月の焼けつくような日差しのもとを、乾いた大地のなかで自転車に漕（こ）ぎ疲れ、倒れ込むように遺跡にたどり着いてほっとしたことを思い出す。そこにヤギの群れとそれを追う少年がやはり憩っていたことが、今も鮮やかに脳裏に浮かんでくる。その彼とはその後も折に触れて会ったが、二年ほど前に彼からもこのことを懐かしく語られたときには本当にうれしかった。

来世への願い

彼については忘れられないことがもうひとつある。二〇年前ほど前、彼は外国での写真コンテストに入賞し、いくばくかの賞金をもらうことになった。当時のビルマとしてはかなりの高額にあたるので、わたしも大いに喜び、何に使うのか、家を新しく建てるのかなどと尋ねてみた。しかし彼が言うには、自宅近くの崩れかけたパゴダを修復して、そこで毎日数珠を繰ることをしたいとの話であった。わたし自身思いもつかないことで、心のなかで彼に、そしてビルマの人にはかなわないと思ったことであった。

ビルマの人たちは自らの来世を願って仏教の実践に励み、お布施を本当に熱心におこなっている。最初に行った当時、人びとが貧しいなかでお寺の修復などを熱心におこなっているのを見て、若い別の友人に、少しはそうしたお金やエネルギーを経済的な方面に向けてはどうかと言ったことがある。そのとき彼は言下にそうした考え方は唯物主義的（マテリアリスティク）であると答えた。ともかくこうした宗教心の篤（あつ）さは現在まで変わることがない。

取り壊されたパゴダ

ところで、写真家の彼のパゴダには後日譚（ごじったん）がある。その後も彼の仏教実践の場としてあり続けているものと思っていたところ、何年か前にその地区の軍司令官が、そのパゴダを取り壊し、後に自分のためのパゴダを建てたという。パゴダなどの宗教施設は確かに誰の私有物でもないが、それにしても有無をいわせぬやり方で取り上げてしまうとは、驚かされるとともに、暗澹（あんたん）たる思いにとらわれたものであった。

思えば、わたしが初めて足を踏み入れてから今に至るまでの長いあいだにわたり、一九八八年の民主化運動のほんの一時期を除いて、ビルマ（ミャンマー）はほぼ軍主導の政権下にあった。そして、民主化に向けて進んでいるというものの、今も軍は相変わらず大きな力をもつ存在であり続けている。軍は英国植民地下の独立運動以来、この国の根幹を担ってきており、その力によってある程度の秩序や治安が保たれてきたともいえるかもしれない。しかし、先に述べた強権的な手法、その体制を維持するために発達した監視や秘密保護のしくみなど、こうしたものに出会うたびに重い気分にさせられてきたことも確かである。先述のパゴダの運命を語ったときの彼は、憤りや悲しみなどの感情を顕（あら）わにすることもなく、諦めというには安易すぎるほどの恬淡（てんたん）とした表情であった。それは今もなお、わたしのまぶたに焼きついて離れない。

1983 年当時のパガン遺跡

僧侶に寄進される品々を吊るした「豊穣の木」（ミャンマー中部にて、1999 年 11 月）

未明にパゴダの境内で祈る人びと（ヤンゴン、シュエダゴンパゴダ、2013 年 3 月）

仏陀に供える灯を用意する若者など（ヤンゴン、シュエダゴンパゴダ、2013 年 3 月）

わかちあいたい

人間学のキーワード

贈与
Gift

岸上 伸啓（きしがみ のぶひろ） 民博 研究戦略センター

わたしたちは、日々の暮らしのなかで頻繁にモノを与えたり、もらったりしている。そのなかには生きていくうえでもっとも重要な食物も含まれている。霊長類学者によるとヒトやボノボなど一部の霊長類を除いた動物は、自分の食物を他の個体に与えたり、交換したりすることはほとんどないという。すなわち、食物を含めたモノの贈与や交換は、人間に特徴的な行動のひとつであるようだ。

では、なぜ人間だけがモノを贈与し、交換するのか。その理由は、人間がほかの動物とは異なり、進化の途上で言語能力に基づく記憶力や思考力を特段に発達させてきたことに関係があるという。ここでは、他の人に物品や金銭を与えることを意味する贈与について考えてみよう。

日本のお中元やお歳暮の慣行、誕生日のプレゼント、入学祝いなどは、贈与の一例である。通常、贈与を受けた人は、いつか贈り手やその家族に、機会をみて何かをお返しすることが多い。お返しをすれば、特定の社会関係は続き、お返しをしなければ、その関係は断絶してしまうかもしれない。また、贈与は贈り手や受け手の思いや願いを前提としていたり、うれしさなどの感情を生み出したりする。

マルセル・モースは、『贈与論』において北アメリカ北西海岸に見られたポトラッチとよばれる過激な贈与儀礼やトロブリアンド諸島におけるクラ交易などの事例を比較検討した。その結果、世界各地で見られる贈与とは、贈る義務、受け取る義務、そして返礼する義務からなる義務的贈答制（義務的で拘束的な交換行為）であると考えた。そしてなぜ贈ったモノが贈った本人に同じモノや違ったモノとして戻ってくるのかを解明しようとした。

モースは、モノには最初の所有者の霊的な力が宿っているので、他の人に渡った後も、もとの所有者に戻って来ることを望むからだと説明した。さらにモースは、贈与は経済的だけでなく、同時に社会的、政治的、宗教的、道徳的な現象であると主張した。彼はこのようなひとつの属性に還元できない現象を全体的社会現象とよんだ。

贈与は、モノを与えることであり、見かけ上、モノの一方向的な移動である。しかし、モースの研究以来、贈与は時差のある交換であり、社会的連帯の形成や維持に不可欠な社会的行為であると見なされるようになった。

最近、贈与が再び注目を浴びている。それはグローバル化した現代社会においても贈与的な行為や現象が認められるからだろう。たとえば、災害に遭った地域や貧困地域の人びとを国家や国際機関、開発NGO、一般市民が支援をすることや、人命を救うための移植用臓器の提供、親が小さな子どもにみせる無償の愛などさまざまな例をあげることができる。これらの行為や現象を贈与のひとつと見なし、理解を試みることは可能であろう。人間は、なぜモノを他の人間に与えるのか。贈与行為の研究は、「人間とは何か」を解明するための鍵になるにちがいない。

異聞逸聞

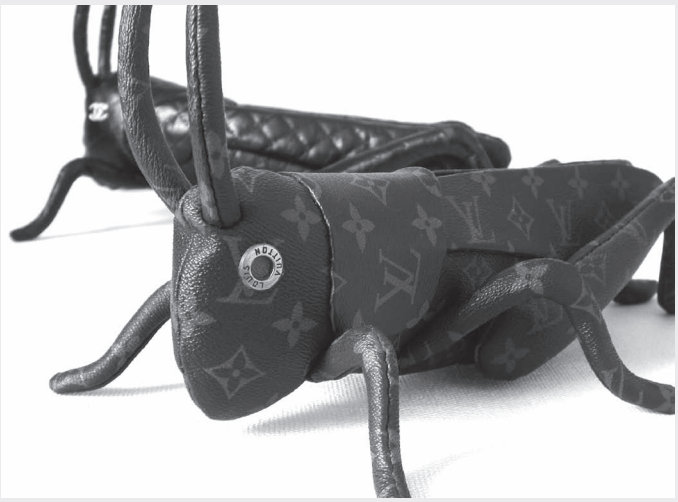
モノグラム美術

岡本 光博（おかもと みつひろ）　美術家・KUNST ARZT 主宰

コピーとオリジナル

「それ、バッタもんちゃう?」。ブランドのバッグをもっている友人を見ると、つい関西人的なツッコミを入れてしまう。「本物は真似される運命にある」というシャネルのことばを引用するまでもなく、ブランドのバッグに限らず、コピーする価値のあるものには、当然のように本物と偽物が混在する。

わたしの作品「バッタもん」がルイ・ヴィトン社（以下、LV社）のクレームによって、神戸ファッション美術館から撤収させられた「ファッション綺譚（二〇一〇）」展も、〝ファッションはコピーとオリジナルのせめぎあいから成立している〟という当たり前のことを表現しようとしたものである（わたしも共同企画者として参画）。しかし、ファッションに限らず商品や作品が〝オリジナルである〟という幻想は、権威や巨大な利権を守るうえでのベースであるため、そこにツッコミを入れることは、いまだにタブーなのだ。規制や権利主張の前に、表現の本質を見つめ直す必要があるのではないだろうか。



バッタもんズ

ダメ出しされた作品たち

このことを考えるのにピッタリなモチーフがある。それはLV社の「モノグラム」である。コピー商品防止の意図もあり作成されたものだが、そのデザインは日本の家紋をヒントにしたともいわれる、まさにアンビバレントなパターンである。一般的には、商品名を意味することばとも思われている程であり、そのイメージも、世界中の人びとの脳裏にインプットされている。当然、世界中の多くのアーティストが作品のモチーフにしている。

しかし、幾つかの作品は、LV社からノーと言われた。〝自称美術家〟扱いされたわたしのケース（むしろ勲章?）から、ナディア・プレスナーさんのようなガッツリ裁判までさまざまである。ただ、そのなかでもフランスのランベール・コレクションの館長が、「アート作品にクレームすることを恥じるように!」とLV社をたしなめることによって守られた、宮川ひかるさんのケースは、クレームに対する〝過剰反応症〟を発症しがちな日本の美術館には、良い薬になるかもしれない。これら非公認「モノグラム」作品だけで構成する展覧会をとおして、表現と規制のバランスについて再考してみてはどうだろう。

3月に京都のKUNST ARZT、4月に東京のspace2*3にて、本文で紹介した作家たちによる作品展が開催予定。詳細はホームページ www.kunstarzt.com

制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

一九八二——民主化にゆれた韓国の学生服

太田心平（おおた しんぺい） 民博 民族社会研究部

かつて日本で学生服といえば、学ラン、セーラー服のイメージだった。じつは、韓国でもそうだったとはご存じだろうか。日本統治時代に制度化された学生服が自由化されて三〇年、韓国の学生たちの制服はどうなっているのだろうか。

ソウルで同年代の韓国人たちと話をしていたときのこと。高校の制服は、学ランだったか、ブレザーだったかと聞かれた。彼／彼女らの認識では、日本の学生服はこの二種類にわかれるのだそうだ。こうした彼／彼女らの認識は、どうやって出来あがったのだろうか。もちろん、韓国人がみな同じ認識をもっているわけではないが、この点をつきつめていくと、面白い話がいくつか出てくる。

二種類の制服

韓国の中学高校の制服は、一九八二年度を境に、新旧二種類にはっきりとわかれる。

生徒は制服を着用して登校すべしという発想が朝鮮半島にもたらされたのは、日本による植民地支配の時期（一九一〇～四五年）のことである。いや、そもそも学校という近代教育の装置自体、その時分に日本からもちこまれたものなのである。以降、八二年度まで韓国では、学ラン姿の男子生徒と、セーラー服姿の女子生徒をみることが出来た。ただ、日本と違っていたのは、どの学校でも、校章以外、まったく同じ制服だったという点だ。つまり、学校が定めたのではなく、国家が義務づけた制服だったのである。

だが、日本でもたびたび議論をよんでいるのと同様に、制服着用の規則には反対意見もあった。個性や自主性を無視している、非人権的だなどという声が高まった。こうして韓国政府は、中学高校の制服を廃止することにした。「教服自律化（キョーボクジヤユルワ）」という。

一九八三年度から、韓国の生徒たちは私服で登校できるようになった。しかし、これも長くは続かない。私服では学校内外での生徒指導が難しいという教師側の事情や、子どもには制服を着せておいた方が安上がりで楽だという保護者側の事情、そして青少年の退廃を危惧する世論に後押しされ、それぞれの学校であらたな制服が制定されていった。細かいデザインや色などは学校ごとに異なるが、ほとんどの学校が欧米でも一般的なブレザーを採用したため、旧式とは明らかに違いがでた。

こうして韓国で新しい制服が登場した時期は、偶然にも、日本で学ランやセーラー服が少なくなっていった時期と重なる。そして、日韓の学生服が似たように変化しているということを、若者たちは学園マンガなどを介して、感覚的に認識していった。

筆者が着ていた学生服は、韓国人には馴染みが薄い旧海軍式だった

校服自律化とは何だったのか

韓国の中高生たちは、けっきょく学生服を着ることになった。では、校服自律化とは何だったのだろうか。

ほとんどの読者は、当時の韓国の人びとが、日本文化の影響を排除しようとしたのだと考えるだろう。もちろん、当時にそういう話がなかったわけではないし、結果的に韓国の学生服が日本式のスタイルを脱したのはこのときだった。だが、それよりももっと考えるべきことはある。

当時の韓国は、軍事政権の真っただなか。独裁打倒をさけぶ民主化運動が、激しさを増していた。これに対し、当時の大統領の全斗煥（チョンドゥファン）は、国民の関心を政治からそらすための策をとった。中学高校の校服自律化、そして髪型に関する規則の緩和も、その例だった。しかし、民主化運動の嵐はその後も強まったし、一九八七年には民主化宣言が出た。中高生に私服登校を許す意味が、すぐになくなったわけだ。つまり、学生服の変遷も、一九八七年の民主化宣言へと続く、韓国現代史の一幕だったといえよう。

今年三月二〇日にリニューアルオープン予定の本館展示「朝鮮半島の文化」では、韓国・朝鮮の伝統的な姿だけではなく、その植民地化や近代化、脱植民地と脱独裁の状況、そして世界文化の韓国的な消化法について、たっぷり御覧いただく計画である。ここで学生服を例にとって御紹介したような数々のストーリーを、展示場でぜひ感じとっていただきたい。

日本の学ランにそっくりな旧式の男子学生服
標本番号 H0274664 ほか

旧式の女子学生服は、控え目な印象のセーラー服
標本番号 H0274667 ほか

新式の男子学生服の例
標本番号 H0274948 ほか

新式の女子学生服の例。体にフィットさせて着こなすのがオシャレ
標本番号 H0274943 ほか

3月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■ 14 時 30 分から 15 時 30 分
■展示観覧料が必要です。3 月 16 日のみ無料。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。
どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

2日（日曜日）
話者：呉屋淳子（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：韓国ソウルの「お稽古」事情を探る！
会場：本館展示場（ナビひろば）

9日（日曜日）
話者：河合洋尚（国立民族学博物館 助教）
話題：中国の風水と開発
会場：本館展示場（ナビひろば）

16日（日曜日）
話者：丸川雄三（国立民族学博物館 准教授）
話題：連想がつなぐミュージアムの情報発信
会場：本館展示場（ナビひろば）

23日（日曜日）
話者：田村克己（国立民族学博物館 教授）
話題：民博 25 年、ミャンマー 35 年、そしてタイガース 55 年
会場：本館展示場（ナビひろば）

30日（日曜日）
話者：寺田吉孝（国立民族学博物館 教授）
話題：映像メディアを用いた研究と博物館活動
会場：本館展示場（東南アジア横休憩所）

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

編集後記

私は「アクションもの」の夢を時々見る。「奴隷商人に追われてた……」というような話を起きしなに連れ合いにすると、「映画の見すぎだ」、と言われる。ツレはスーパーでショッピングカートを押していたり、会議に出ていたりという日常生活の延長線上のような平穏な夢が多いらしい。夢の見方というのは性格に由来するものなのだろうか。私は会議や買い物の夢など見た覚えがない。

編集会議でも、どんな夢をよく見るか、いまだに忘れない夢は何か、という夢談義で盛り上がった。予知夢を見た不思議な経験を持つという人、夢日記を続けているという人がいる中で、「物心ついてから夢というものをいっさい見たことがない」、と言い切る同僚もいた。夢をまったく見ないという人が本当にいるのか、あるいは目覚めが良すぎて夢を記憶していないだけか。きっと本号に登場した神谷氏の夢解読マシンにかかったら解明されるのであろう。

寝ている人の脳の中を覗き見ることができる機械を手に入れたら……。そういえばそんなSFアクション映画もあったような。（山中由里子）

●表紙：紙人形「アレブリヘ」　標本番号 H0131687
地域：メキシコ　民族：メスティソ
制作者のペドロ・リナーレスが、死地をさまよう重病にかかったときにみた悪夢を表現したもの

次号の予告

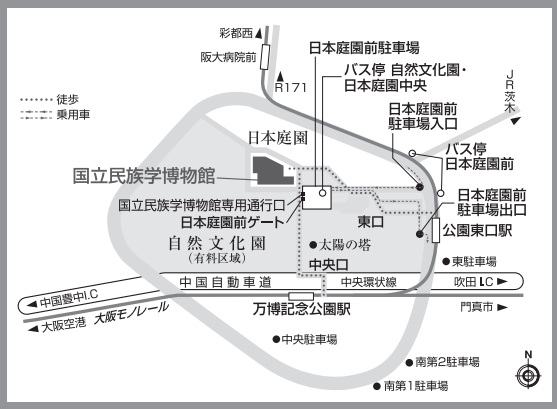
特集
穴だけじゃない考古学

月刊みんぱく 2014 年 3 月号
第 38 巻第 3 号通巻第 438 号　2014 年 3 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒 565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　八杉佳穂
編集委員　山中由里子（編集長）　樫永真佐夫　久保正敏　庄司博史　菅瀬晶子　丹羽典生　野林厚志
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial